乙女のバカ心

夢みる乙女ほど手に負えないものはない。

彼女らはいつもボーっとしている。授業中でも登下校中でも電車の中でも、すぐにボーっとしてしまう。

わたしが夢みる少女だったころも実に大変であった。生まれつきボーっとしているわたしが、日常生活に夢まで取り入れて生きた時期であるから、そのボーっとし具合ときたら、水族館の水槽の中をグルグル泳ぐまぐろのようであった。

夢みる少女の初期のころ（十五、六歳ごろ)、わたしはさまざまな芸能人に熱を上げていた。原辰徳、渡辺徹をはじめ、CMタレントの少年や若手お笑いスターまで、さまざまな分野にわたり次々と好きになっていった。

渡辺徹にはラブレターまで書いた。

夢みる少女の怖いところは、好きになった芸能人が、もしかしたら自分に振り向いてくれるかもしれない、と思い込んでいるところである。

わたしも渡辺徹がもしも手紙の返事をくれて、もしも会うことになっ

て、もしもつきあうことになったらどうしよう……と本気で心配しながらも期待していた。

ファンレターを出してから三ヶ月後、わたしの期待とは裏腹に、商魂たくましいファンクラブの案内状が届いた。そのころから渡辺徹は太り始め、わたしの情熱も冷めていた。

芸能人に夢中になるのをやめたわたしは、理想の男を勝手に作り上げてはボーっとする、夢みる少女第二期に突入した。

ボーっとしている頭の中では、いつでもわたしの好みのタイプの少年が、かなり美化された私とつきあわされていた。

彼は背が高く頭がよく、芸能人にもいないほどすてきな顔立ちをしており、優しく誠実でそのうえお金持ちであった。現実にはいるはずもなく、万一いたとしても絶対わたしなんかとつきあうはずはない。そんな男が空想の中ではわたしの思うままなのだ。

わたしの空想パターンはだいたい決まっていた。美化されたわたしは家柄まですり替え、良家の娘という設定になっている。わたしはおしゃれをしてたそがれどきの窓辺で彼を待っていると、間もなく彼はランボルギーニだかフェラーリだか知らないが、とにかく幻のスーパーカーに乗

ってわたしを迎えに来るのだ。

このころからわたしは、“夢みる恋の日記帳”をつけ始めていた。日記というよりは詩に近いが、それは読む者を恥ずかしさで震撼させるパワーがある。

今日ね

久しぶりに

大好きなあなたの夢を見たの

ずーっと夢でもいいから

あなたといっしょにいたかったわたし

ばかっばかっ、こんなもん書いてたわたしのばか。こんな詩に、下手なカラーイラストまでつけてたのだから死にたくなる。

ところがこんなものを、二年半も書き続けていたのだ。

当時のわたしは、ちょっとどこかへ出かけるときも“もしかしたら恋のチャンスがあるかも”などと胸を膨らませてイソイソと歩いていたものである。

夢みる少女第三期は、隣町の進学校に通う男子生徒への熱烈な片思いである。とにかく通学途中でも彼に出会うとわたしの全身の力は抜け、かばんをバタリと落としたり、クラッと目まいがしたりするのだ。

よく、漫画などで大げさに純情少女が赤くなってかばんを落としたりするが、まさかそんなことがほんとうに自分の身の上に起こるとは思わなかった。

片思いは急速に確実に加熱していった。彼は頭もよく男らしくハンサムで背も高い。こんなすてきな人は、どこを探してもいないだろう、この人以外の男と結婚なんてしたくない……。

早急な考えで思い詰め、どうにもならない片思いを嘆いてふろ場でさめざめと泣いたりしたものである。

さららももこ『もものかんづめ』集英社より